

第4回極東・サハリン経済交流セミナー2017を平成29年11月17日に北海道サハリン航路株式会社と共催で開催しました。

今回は「サハリン航路が目指す人流・物流に向けた挑戦」をテーマに、北海道銀行ロシア室長の三上氏、ロシア関連ビジネスを手がける(株)ノマド常務伊藤氏、(株)道銀地域総合研究所事業部長の加賀屋氏に講演いただきました。

三上氏からは、企業、銀行、地域商社の三位一体によるロシアビジネスを展開してきた経験を踏まえて、講演いただきました。

「道銀では、「物流」と「商流」をセットにその役割を担える「地域商社」について、社内ベンチャー制度を活用して「北海道総合商社」を設立。銀行がロシア向け地域商社をつくったことは、日本政府からも注目され、



様々な地方銀行や、港のある地域から視察や地元を活性化させるために地域商社をつくりたいと相談を受けている。ロシア極東向けに物を輸出しようとしても物流会社や大手商社では、1コンテナ位の量では扱ってくれない。道内企業のもので単独で輸出できる量には届かないので、北海道の物が半分、残りの半分は全国から集めることによって物流コストを下げることが必要である。ロシア人は、日本製のお菓子・ジュースを好み、食べ物以外では、トイレトペーパー・ティッシュ・紙おむつなど日本製品が欲しいので、地域商社が小ロットのものをたくさん集めて1コンテナに混載することにより、物流コストを下げ輸出の仕組みを提案できる。」と地域商社のメリットを提言されました。

また、「以前は、日本海側の港はロシア向けの中古車で経済が成り立っていたが、今は全くだめで、今後は「地域連携」を図りながら各港で荷物を集めて物流コストを抑えて輸出することも対策のひとつ」と話されました。

(株)ノマドの伊藤氏からは「稚内港からロシア極東への食品輸出拡大」に向けての提言をいただきました。

「ロシア極東の日本食品の輸入状況について、沿海地方は水産品の割合が大きく、ハバロフスク地方は飲料とアルコール類の輸入が多く、サハリン州はチョコレートや菓子の輸入が多い。ロシアでは、日本食ブームが継続して拡大中で、日本食レストランに日本食品も併設して販売されており、日本食品のPRと拡大の面で十分に望める市場と思っている。平成28年12月に開催された北海道フェアでは、稚内港からコルサコフ港までの短いリードタイムを活用して果物を輸出することができた。現地ニーズのある果物の売れ行きが良く、みかんを箱買いする人も散見された。稚内港からコルサコフ港まで6時間から8時間という「短いリードタイム」で輸送できるので、サハリンを「ストックポイント」とした輸出拡大戦略を確立できないか。空輸でハバロフスクへ(400円/kg)運べるし、また、トラックに搭載したまま貨物船でホルムスクからワニノという大陸側の港へ18時間でアクセスでき、ハバロフスクまでは車で13時間である。



先ほど、三上さんも述べられていたが、ロシアの場合、少量であっても、品目数では非常に貪欲な要求もあるので、予め複数の貨物を混載して運ぶ「小口混載」の活用が非常に重要」と話されました。

(株)道銀地域総合研究所事業部長の加賀屋氏には「ロシア極東・サハリンビジネスの展望」について講演いただきました。

「私からは、サハリンで建設業を中心に多角的事業を展開しているフィネコ社のマルティノフ社長を8月に稚内市に招聘して関係機関と意見交換をおこなった内容をお話したいと思う。マルティノフ社長は「日本からの輸入だけでなく、貿易はお互いキャッチボールをしないと物流としては難しい」と発言。「おがくず」は酪農用牛舎の敷き藁材として、飼料用の「麦芽の搾りかす」など、今後、輸出を検討していきたい。

輸出入の商材について、稚内市の企業と価格面も含め商談を重ねることにより、掘り起こしを進めている。

道北物産展では、フィネコ社と旭川の作業手袋メーカー「青井商店」が出店して、北海道の寒冷地技術の企業とフィネコ社の取組を紹介。取引がスタートして5年が経ってようやく販売に繋がっている。初年度でいきなりビジネスというのは中々難しい。継続的な商談とお互いの信頼関係作りを行って長期的なビジネスへと育つと思っている。」と発言されました。

最後に北海道サハリン航路(株)の日向寺氏から、サハリン航路についてお話がありました。

「2016年から運航している「PENGUIN33」は270トという小型船舶で、船酔いや欠航が多く「安定性や快適性」に問題が多くサハリン州民からも多くの意見が寄せられた。2017年から本格営業ということで、2,200人程度の旅客を見込んだが、最終的に1,374人の乗船客で終わりました。

強風と波高のため5往復10便の欠航があり、「安定性や快適性」からみて問題がある。一方で、特徴的なのが欧米人が大陸からサハリンに渡り、稚内にくる旅行客を多く見かけた。また、「バックパッカー」と呼ばれる日本人青年や学生の姿も多く、今後、彼らに向け「新たな需要の掘り起こし」が必要と思う。

現在の日ロ間の状況ですが、ビザ発行要件が緩和され、ロシア人に対し3年間の数字ビザが発給され、2018年1月からはインターネットで申し込むとサハリンのコルサコフ港で外国人ビザが取得できるようになる。この制度がバックパッカーの航路利用に有効的に働くのではないかとと思う。

最後に、本航路は樺太時代から玄関口として歴史的役割を果たしてる。他都市にはない「象徴的な事業」なので、我が社が果たす役割は非常に重要なのではないかと考えている。」と発言されました。



講師の皆様、出席者の皆様、お忙しい中、お集まりいただきありがとうございました。

